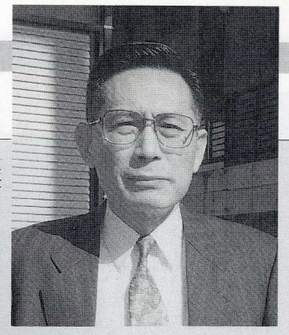
理学部

キャンパス内道路に名前を

理学部長　牟田泰三



欧米の街を訪ねて気がつくことの一つは、どんな小さな道でも名前がついているということである。大きくても小さくても、それぞれの道が歴史を担い、個性を主張しているようにみえる。日本では、大きな通りを除いて、道に名前がついていることはまれである。私の家の前の道路にも、もちろん名前はない。

思い出というものは、なぜか道と一緒に甦えることが多い。むかしフェルミ国立加速器研究所にいたころ、まだ幼なかった次男を連れて歩いた宿舎の前の道には、Sauk Circleという名がついていた。この道の名とともに、研究所でのあらゆることが思い出されて、懐かしさがこみあげる。京都の銀閣寺の近くには、哲学の小径というのがあって、観光客の途絶えた冬にあそこを通ると、何となく思索的になるから不思議だ。

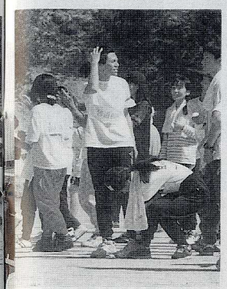
広島大学の新キャンパス内の道路にも、特別なものを除いて名前はまだない。法学部と理学部の間の道は「シラカシ通り」がいいかな、いや、本部事務局へ通じているから「中央通り」かな、工学部の前の通りは「カエデ通り」だろうな、などと考えていると楽しくなってくる。

今春卒業する学生諸君も、初めて彼女(氏)と出会った道、毎日昼食に通った道、卒業研究のために実験施設に通った道など、思い出多い道がいっぱいあることであろう。これらの道に気のきいた名前がついていたら、卒業後もその名前とともに、大学で過ごした日々を懐かしく思い出すことができるであろう。その思い出の中味は、学生諸君と我々教職員の共同作業でつくるものであるが、それを学生諸君が思い出すときの触媒は、道の名前だ。

学生諸君がすばらしい思い出とともに社会に巣立ってくれることを願うとともに、次に皆さんが帰ってきたときには、その思い出に名前をつけておきたいと思う。

大学時代にできること

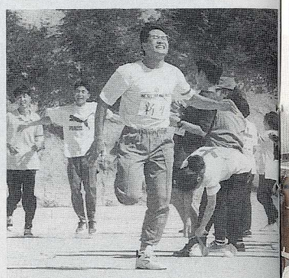
理学部　小松達也



「大学時代にしかできないこと」こんなことを考え出したのは、三年が終わった春休みだった。それまでの私は、ただのんびりした大学生活を送っていたにすぎなかった。しかし、〝卒業〟を意識しはじめた時、自分の過去を振り返って、何も残っていないことに気づいた。

私は悩んだ結果、この大学生活最後の年を〝後悔しない年にしよう!〟そう決めた。そこで、他の同級生が就職活動をしている時間を、私は自分のしたいことに費やした。

まず、広島赤十字奉仕団というボランティアサークルに入った。小さな子どもたちと話をしたり、かけっこしたり…。昔からやりたいことだった。それからアルバイトを増やし、蓄めたお金で初めて旅行をした。他にもいろんなことにチャレンジした。



他のみんなより一年遅れることにはなったけれど、後悔はしていない。逆に、充実した生活を送れたことがとてもうれしい。大学時代のいい思い出ができた。ばんざ〜い!!

学生時代の思い出

理学研究科博士課程前期　堀池晋太郎

山陽石油の橋渡健児録。五月二十七日バッテリーのふた落下紛失。お客は一時間待ち。六月三日みやびの灰皿落として破損!みやび激怒。六月十日雨の中ティッシュ運び。「やばいやばい」といった後、二十五箱全てを水たまりに落とす。言うまでもなく全て破棄。本人は、「いやあ、バッタが飛んできたよ」などと見え透いた嘘を並べた。

六月二十七日トゥデイをピットに入れようとして脱輪!　ドライブシャフト曲がって修理代十五万円。七月二十九日給油中にライター着火。川本所長の逆鱗に触れ、その場で帰宅を命じられる。

九月二日釣り銭機の硬貨ボタンを現金フリーボタンと勘違いし、釣り銭機を相手にガソリンを注ごうとする。そのせいで釣り銭機は音が鳴らなくなり、ビューティーに修理を依頼し、五万円支払う。

十一月十二日竹田さんの電話の話に返事して二十数発殴られ、危うく台湾へ連れて行かれそうになる。以上氷山の一角。

九年間の思い出

理学研究科博士課程後期　小野泉

研究室の大山スキー旅行にて(本人右端)

私が入学してからはや九年。その間に広島大学は一回の大引っ越しをし、私は六回引っ越しした。広大はその名のとおり広大な敷地を手に入れ、私はやや質量の増加を得た。もちろん私が手に入れたものは、余分な体重だけではない。

九年の間に私は多くの経験と夫とすばらしい友人を得たし、「研究」に出会うことができた。

私の研究の始まりは卒業研究であったが、ためらわずに修士課程に進んだ。最初に自分の名前の入った刊行論文を手にしたときの喜びは忘れられない。修士論文を書く頃には研究の厳しさも知り、自分の力に不安を覚えもしたが、物理への好奇心や研究の楽しさの方が勝り進学した。

いま博士号取得をめざして最後のがんばり中である。九年間を思い返せば反省することばかりだが、失敗も成功もすべて良い経験となった。

未筆ながら私を支えてくださった先生方、技官の方々、事務の方々、そして研究室の面々、友人、夫と両親に感謝いたします。

医学部

大学は、キャンプだ!

医学部　福長敦子

振り返れば、キャンプ生活のような四年間だった。保健学科「花の一期生」である私たちの学生生活は、教室の雨漏りで幕を開けた。

しかし、同じキャンパスに他学部のある頃にはまだ良かったのである。東広島への統合移転が完了すると、まず暖房が止まり、水道水は赤く濁った。半袖半ズボンが原則の実習も、頼りはストーブ一台きりである。

卒論提出が間近になると、教官まで霞に移転してしまい、「キャンプ色」はますます濃くなった。校舎内を占拠(?)した学生は、床にダンボールを敷いて仮眠し、水汲みは日課となり、眠気ざましに夜中に歌いまくっても誰にも叱られなかった。壁画を描いてしまう教官も出現。外に出てみると隣の建物がなくなっていて、あらびっくり!ということも…。

懐かしい旧総合科学部校舎は、今は立入禁止となり、解体を待つばかりである。キャンプが終わればテントは片付けられ、思い出と少々のたくましさが残るだけ。私たちの四年間にふさわしい幕切れなのかもしれない。

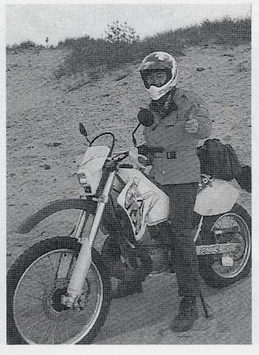
お世話になりました

医学系研究科博士課程前期　荒井次一

今、長かった学生生活にピリオドが打たれようとしている。その中でもやはり大学生活が最も印象深いものであったと思う。

学校が休みのとき(行きたくないときも含む)、私を不思議な世界に導いてくれたものがバイクである。バイクで遠くに行くたびに発見や事件が起き、飽きることなどありませんでした。例えば日南海岸で立ち小便をしたとき、突如波が押し寄せてきて、小便混じりの塩水で靴がびしょ濡れになったり、鳥取砂丘に突入したとき砂に埋もれて脱出ができなくなったりと、本当にいろいろあった。

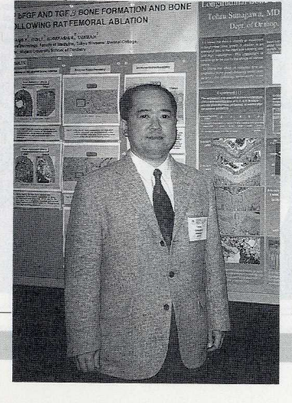
とにかくいろいろあったが、私が広島大学に来て得たものの中で一番の収穫は、自分という人間を理解できてきたと同時に、両親をはじめ自分の回りにいる人々の大切さがよく分かったことではないだろうか。



ありがとう、広島大学。ありがとう、回りの皆。ありがとう、ママキッチン。

四年間で得たもの

医学系研究科博士課程　砂川融



十年前に広島大学を卒業した時には、再び学生になるとは思いもしなかった。入学当初、授業料が二・五倍になっていることに驚き、周囲の人たちの学問的姿勢に圧倒され、しばらく憂鬱な日々の連続であった。

あれから四年という月日が流れ、その間数々の悪戦苦闘があった。その中で最も困ったのは、それまで漫然と日常業務をこなしていたために学問的思考ができず、自分の研究が軌道に乗ったのは三年目からになってしまったことである。学部生の時のように学生生活を楽しむというわけにはいかなかったが、物事を学問的に考えるという思考回路が、多少なりとも自分の頭のなかにできたのは大いなる収穫であった。

最近、教室(医局)内が禁煙となり、階段の踊り場に出て霞キャンパスを見渡すことが多くなった。動物実験施設や保健学科のビルがほぼ完成し、霞の発展を目のあたりにしていると、キャンパスを離れることに一抹の寂しさを感じるが、広島大学がますます発展していくことを願ってやまない。

人間性豊かな知的専門職をめざして

医学部長　調枝寛治

わが医学部は、昨年八月に創立五十周年を迎えた。本年は、保健学科の第一期生が希望に燃えて卒業する。ようやく、医学科、総合薬学科に加えて保健学科の三学科が足並みをそろえ、さらなる発展をめざして新しい五十年の第一歩を踏み出したところである。

三学科それぞれの特徴を基盤にして、わが医学部の学部教育は、医学・医療・保健・福祉の実践者にふさわしい豊かな人間性と幅広い教養を身につけ、専門職となるための基礎的知識、技能、態度を習得し、さらには科学的思考力と創造性に富む人材を育成することを共通の理念としている。二十一世紀の医学・医療を担う医療従事者のリーダーとなる卒業生諸君には、単に一地域にこだわることなく、地球規模での活躍を期待したい。

近年、特に医療従事者には、知的専門職としての適性が強く求められている。例えば、使命感を持たなければならない。一般教養を豊かに持つべきである。長い修練期間が必要で、生涯にわたって勉強しなければならない。商売でなく、公的サービスであり、天職であることを銘記すべきである。

真の知的専門職たり得るには、これからが正念場である。学ぶことは多い。急速に進展する科学技術の時代を生き抜く能力を身につけながらも、常に、謙虚さ、真っ当な人間としての感性、それにユーモアの心も、きちんと身につけてほしい。

何はともあれ、卒業、おめでとう。